

「ふれあい学習会」

基本情報

学校名

荒尾第一小学校

児童/生徒数

455名

学校運営協議会

平成25年4月 設置

委員構成

地区協議会会長
市生活相談支援センター自立支援員
民生児童委員
PTA関係者
区長
教職員
など 15名

会議回数（令和7年度）

5回

背景・取組概要

地域理念 「人を愛し つながり合い ふるさとに生きる 人づくり」

学校教育目標 「地域に学び、未来を切り拓く子どもの育成」

経営方針 「人権尊重の精神を基盤に、コミュニティ・スクールの特性を活かして家庭・地域・行政と連携し、未来に生きる児童の資質・能力を育成する」。

本校はコミュニティ・スクールとして、学校運営協議会と連携しながら地域の人的・物的資源を積極的に活用している。変化の激しい時代において、子供たちが自ら課題を見付け、対話を通して学びを深める主体性が必要である。その実現に向け、地域人材による学習支援や体験活動の充実を図ることで、子供を中心とした五者が連携・協働する教育活動を推進している。

→子どもを中心に据えた五社連携による学校づくり、子どもの主体的な学びの実現に向けて、地域と連携・協働し、充実した教育活動を行う。

工夫・ポイント・特徴的な取組

◆コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進として

「第3回一小ふれあい学習会」

○目的：長期休暇から通常の学校生活にスムーズに移行できるよう、夏休み最後の3日間の午前中に学習会を開く。

○日時：令和7年8月21日、22日、25日 8:30～11:00

○参加者：4～6年生児童の希望者（46名）

○援助者：地域・保護者・学校運営協議会メンバー（16名）、海陽中生徒（11名）、岱志高校生徒（11名）

○場所：荒尾第一小学校各教室

○内容：夏休みの宿題、自主学習、習字、絵画など持参した題材を児童が行う中で、援助者が見守り及び学習援助を行う。

○その他：児童についてはP災利用、ボランティアはボランティア保険加入



成果・効果

- 夏休みの最終週に日程を調整することで、夏休みの宿題の仕上げや夏休み明けに向けた心身の調整に効果的だった。
- 援助者が37名と潤沢にいたため、マンツーマンでの支援も行うなど充実した学習活動となった。
- 習字や絵画など、作業を伴う教室を別室にして、それぞれが得意な人材を援助者としたことで、子供たちも取り組みやすくなった。

課題/展望等

- 援助者の数に対して児童の参加者数が少ない日もあったため、もったいない日もあった。次年度以降も続けていく予定であるので、本活動の更なる周知が必要である。
- 児童の急な欠席もあり、安全面を考慮して家庭に連絡をとる必要もあった。参加者には欠席連絡の方法も周知する必要があった。

自他を大事にする子供、学び続ける子供、共に未来を切り拓く子供

基本情報

学校名

万田小学校

児童/生徒数

407人

学校運営協議会

令和30年4月1日 設置

委員構成

地域学校協働活動推進員
地区協議会委員
保護者・万田小応援団関係者
民生児童委員
少年指導員
学識経験者・教職員 15名

会議回数（令和7年度）

5回

背景・取組概要

「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と地域が共有し、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現のため、学校と地域が一体となって子供たちの成長を支えていくことが必要である。

そこで、保護者や地域住民の代表が一定の権限を持って、学校の運営のために必要な支援について協議する学校運営協議会が、荒尾市教育委員会により指定・設置された。これにより、本校は、コミュニティ・スクールとして「地域とともにある学校づくり」を推進している。学校運営協議会を中心に、地域貢献や学校貢献の取組を進めている。

工夫・ポイント・特徴的な取組

- (1) 組織的・継続的な体制の構築 = 持続可能性
- (2) 当事者意識・役割分担 = 社会総掛かり
- (3) 目標・ビジョン（未来への展望）を共有した「協働」活動
 - 学校運営や必要な支援に関する協議・計画・評価を児童とともに行う。
 - 課題解決につながる活動は、地域学校協働活動推進員が地域住民や保護者等に依頼して実施する。
 - 学校運営協議会のキーワードは「当事者意識」「責任」。



委員さんとのランチミーティング



地域とのオリーブ収穫



6年生万田坑ガイド
八幡小、三角小本校3・5年生、
保護者へガイドをする



「くじらぐも」による読み聞かせ



委員さんへの提案・熟議

成果・効果

- 校長や教職員の異動があっても、学校運営協議会によって、地域との組織的な連携・共同体性が継続できた。
- 学校や地域、子供たちが抱える課題に対して関係者が当事者意識を持ち、「役割分担をもって連携・協働による取組」ができた。
- 協議会や熟議の場にて、子供たちがどのような課題を抱えているのか、地域でどのような子供を育てていくのか、何を実現していくのかという「目標・ビジョン」を共有できた。

課題/展望等

- 学校の教育目標を「地域」「保護者」「学校」でさらに共有していく必要がある。
- ◇本年度から「心づくり部」「体づくり部」「学びづくり部」の組織で分担して活動してきた。来年度は、さらに各部の特色を生かした自主的な活動に取り組んでいきたい。

平井大好き！ ふるさとに誇りを持ち 学び合い 支え合い ともに未来を切り拓く児童の育成

基本情報

学校名

荒尾市立平井小学校

児童/生徒数

128名（2/20現在）

学校運営協議会

令和4年4月1日 設置

委員構成

地域学校協働活動推進員
荒尾市議会議員
平井地区協議会会長
PTA会長・元PTA会長
荒尾市男女共同参画審議会委員
荒尾市少年指導センター
平井小学校長など 10名

会議回数（令和7年度）

6回

背景・取組概要

校長や教職員の異動があっても、学校運営協議会によって地域との組織的な連携・協働体制が継続される仕組みづくりができつつある。今後、児童の地域行事への参画を通して、児童の自己肯定感や自己有用感を育み、地域の方と協働する機会を通して、近い将来、地域を支え、地域に貢献する人材に育ててほしい。

→児童が地域の方と交わりながら主体的に関わる活動を仕組み、自己肯定感や自己有用感を高める。

工夫・ポイント・特徴的な取組

◆学校運営協議会

5月に初めて実施した5・6年生全員と学校運営協議会委員との意見交換会で、「よりよい平井小にしていこう」をテーマに、児童の委員会ごとに様々な意見等が交わされた。

◆地域学校協働活動

荒尾第三中学校生徒にサマースクール（夏休み学習会）への協力を依頼。第1回目となる本年度は10名もの生徒の協力をいただいた。

◆コミュニティスクールと地域学校協働活動の一体的推進「平井地区史跡探訪ウォーキング」

平井地区協議会を中心に、学校運営協議会、地域の方々や平井小児童・職員が参加した平井地区史跡探訪ウォーキングでは、6年生児童がそれぞれの史跡について事前学習をし、紹介した。児童は、学んだことを「分かりやすく伝える」ことを目標とし、大きな資料を準備し、クイズやペープサートなどで、工夫した説明をしていた。



成果・効果

○学校運営協議会委員の前で自分たちの思いや取組を発表することを通して、その思いを大人に受け入れられたり、自分たちの取組に大人が賛同し、関わってもらったりする経験は、児童のやる気をますます引き出し、自己肯定感につながっていくと感じる。また、委員会の時間として設定したことで、全職員が熟議に参加でき、情報を共有することができた。

○平井地区史跡探訪ウォーキングでは、6年生の説明がとても分かりやすかったと地域の方からも好評だった。地域の方と接したり、自分たちの考えや学びを発信したりする機会を得たことで、自己有用感の高まりとともに、地域への愛着や地域に対する誇りを持つことにも繋がる。

課題/展望等

●地域学校協働活動推進員の方において、夏休みの中学生ボランティアを実施することができ、児童生徒ともにより経験ができたが、中学生に対して、小学生の参加人数が少なかったのが残念だった。来年度も継続して実施することが大事だと感じる。そのため、今年度の参加児童の感想を伝えるなどして、参加の呼びかけを工夫していく必要がある。

●3月の最後の学校運営協議会において、児童が今年度の委員会活動で取り組んだ活動報告（成果や課題）をする予定である。その後、各委員会ごとに協議会の方と話し合いアドバイスをもらって来年度の計画に生かしていく。

<チャレンジ 新たな一歩を踏み出そう> 子どもが安心して通え、地域住民が誇りに思える学校づくり

基本情報

学校名

荒尾市立府本小学校

児童数

59名

学校運営協議会

令和4年4月1日 設置

委員構成

地域学校協働活動推進員
府本地区協議会会長
府本地区区長
保護者・PTA関係者
民生委員・警察関係者
少年指導センター指導員
学識経験者
学校ボランティア代表
など 14名

会議回数（令和7年度）

5回

背景・取組概要

◆本校は、昨年創立150周年を迎えた。全校児童59名の小規模校で、児童数は年々減少してきている。しかし、本校出身の方をはじめ、地域の方々が本校を愛してくださり、学校への手厚い支援をいただいている。広い校区を少人数の児童が安心して通える仕組みを構築することと、地域の方々の支援を受けた体験活動「本物体験」等を活用しながら、児童が「主体的に動く力(すすんで)」「発信する力(やってみよう)」「関わり合う力(みんなで)」を高めていく地域貢献活動の充実が必要であった。

→子どもが安心して通え、地域住民が誇りに思える学校づくりをとおして、「地域とともにある学校」「学校を中心にした地域づくり」を目指す。

工夫・ポイント・特徴的な取組

◆学校運営協議会

- 年間5回開催している。年度当初と最後の2回は教職員との熟議を機会を設定し、学校課題の共有や相互の依頼内容の確認、その成果と課題を話し合っている。また、学校運営協議会委員から授業や児童の様子を評価していただくだけでなく、施設・設備の安全点検を実施していただき、安全・安心な学校づくりへとつなげている。
- 委員と児童との熟議の機会を3回設け、地域から児童への協力依頼や児童から地域へ貢献するための具体的な提案を行い、協議後に実施し振り返ることで、児童の資質・能力の向上に努めている。

◆地域学校協働活動

- 地域行事であった「歩け歩け大会」と児童が地域の方々の協力で行っている「本物体験」で収穫した野菜などを販売して大会を盛り上げることを企画し、児童の地域貢献活動とした。
- 地域への貢献活動として、ほかにも3・4年生が府本地区敬老会に参加して元気を届けたり校区内クリーン作戦を実施して、地域の清掃活動を行ったりした。

◆コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的実施

- 地域学校協働活動委員が学校運営協議会委員となり、協議内容を具現化できるように学校と地域の橋渡し役として活動している。
- 安心して通える学校づくりにむけて、地域の民生児童委員協議会に協力を依頼して、あいさつ運動や登校時の見守り活動につなげた。また、学習ボランティアの手配など、学習の充実にむけた取組も行っている。



成果・効果

- 地域学校協働活動推進員が学校運営協議会に所属することで、学校課題を学校と地域で共有しやすくなるとともに、学校課題を解決するために地域の方々の協力を得ることができ、児童の安心につながった。
- 地域行事に児童が主体的に参加することで、児童の伸ばしたい資質・能力を高める機会が持てた。また、児童や保護者が地域行事に参加することで、地域行事が活性化した。

課題/展望等

- 学校と地域の結びつきが一層深まるよう、これまでの活動の継続と合わせて、低学年の児童も貢献できる活動を考える必要がある。
- 地域の方々から様々な協力の機会を得ている。「本物体験」をはじめとした地域・保護者から協力いただく諸活動を整理し、見通しをもって計画的に実施できるよう年間計画を作成する必要がある。

みんなが行きたい学校を目指して！

基本情報

学校名

荒尾市立八幡小学校

児童/生徒数

190名

学校運営協議会

令和4年4月1日 設置

委員構成

地域学校協働活動推進員
八幡地区協議会
元PTA会長
野原区長
野原八幡宮「風流」保存会
野原八幡宮権祢宜
PTA会長・副会長

会議回数（令和7年度）

5回

背景・取組概要

だれもが「行きたい学校」、つまり「学校に行きたい（子ども）」「子どもと勉強に行きたい（教職員）」「子どものがんばりや成長を見に行きたい（保護者）」「加勢に行きたい（地域・行政）」を目指して、以下のような取組を実践した。

工夫・ポイント・特徴的な取組

【事例1】野原八幡宮例大祭「風流」に関する取組

本校に隣接している八幡地区のシンボル野原八幡宮例大祭「風流」に関して、6年生の「ボランティアガイド」を最終目標として、学年ごとにテーマを設けて学習を行っている。その中で風流節頭保存会の方をゲストティーチャーにお招きして体験活動を実施している。地域の伝統文化を地域の方と一緒に作り、継承していく、大変有意義な学習となっている。



【事例2】野原八幡宮の清掃活動

本校に隣接している野原八幡宮の清掃活動を定期的に行っている。八幡地区協議会のボランティアスタッフにお手伝いいただきながら一生懸命に取り組むことができている。清掃活動とともに八幡地区の歴史や伝統文化についても学ぶ機会となっており、子どもたちの地域を愛する心身の育成につながる取組である。



【事例3】野原ハッピーガーデンでのさつまいも栽培及び花いっぱい活動

学校に隣接する場所に野原地区の畑がある。その畑を利用して、毎年2年生が地域の方々と共にさつまいも栽培及び花の栽培活動に取り組んでいる。畑づくり、畝づくり、マルチ張りなど地域の方の協力を得ながら、いも植え、いもほり体験をさせていただいている。



成果・効果

- ・学習を通して、自分たちにとって身近な野原八幡宮や「風流踊」が熊本県や全国に誇れる文化遺産であることを実感し、年々学びに対する意欲が高まってきている。
- ・活動を通して、子どもたちが野原八幡宮に限らず、登下校の際にごみを自主的に拾う姿が見られるようになっており、地域を愛する心の育成につながっている。また、地域の方々とふれあう機会が増えたことで、地域における子どもたちの挨拶が活発になっており、それに伴い地域の方々の子どもたちへの関心の高まりがみられるようになった。

課題/展望等

- ・子どもたちに地域を愛する豊かな心身を育てていくためにも、子どもたちのアイデアを生かした取り組みを生み出すなどして、より主体的に活動できるようにしていく必要がある。
- ・野原ハッピーガーデンの栽培活動については、隣接する畑とは言え、学校敷地外にあるため、日常的な水かけ・草取りなどの活動が十分にできないことがあった。活動を行う畑を学校敷地内の畑に変更するなどの工夫を行い、児童がより主体的に活動できるようにしたい。また、収穫したさつまいもを調理したものを、お世話になった方に食べていただくなどの交流も行っていきたい。

みんなで創る、地域とともにある有明小学校

基本情報

学校名

有明小学校

児童/生徒数

184名

学校運営協議会

令和4年4月1日 設置

委員構成

- ・地区協議会会長
- ・荒尾湿地センターセンター長
- ・民生委員・児童委員代表
- ・社会教育主事補
- ・人権啓発センター推進室室長
- ・おやじの会会長 ・主任児童委員
- ・PTA関係者
- ・地域学校協働活動推進員
など 14名

会議回数（令和7年度）

5回

背景・取組概要

有明小学校では、「ともに支え合う学校」を目指し、地域との強い連携を大切にしている。地域には、地区協議会、見守り隊、まかせん会、おやじの会、ティンカーベル（読み聞かせ）など、子どもたちの成長を支える多様な団体が存在する。これらの団体と学校が協力し合うことで、教育活動はより充実し、子どもたちにとって「本物の学び」につながっている。

工夫・ポイント・特徴的な取組

有明小学校では、地域とともにある学校づくりを目指し、子どもたちに「本物の学び」を提供するための取組を積極的に進めている。その一つが、学校から地域への働きかけとして行っている「海の美術館」の活動である。この取組は、有明海を舞台に、子どもたちの作品を地域に発信する試みであり、地域と学校の絆を深める活動となっている。

海の美術館では、各学年ごとに一枚の大きな絵を仕上げる。子どもたちは仲間と協力しながらテーマを考え、構図を決め、色彩を工夫し、完成までの過程を楽しむ。この活動は、協働性や創造性を育む貴重な学びの場となっている。また、完成した作品は有明海に飾られ、地域の人々に公開されることで、子どもたちは自分たちの表現が地域に受け入れられ、評価される喜びを実感する。

この取組を支えているのが、地区協議会をはじめとする地域の力である。材料の準備や絵の運搬など、子どもたちだけでは難しい作業を地域の方々が担っている。こうした協力は、学校と地域の信頼関係を深めるとともに、子どもたちに「地域に支えられている」という安心感を与える。さらに、地域の方々が学校の活動に関わることで、子どもたちはふるさとへの愛着を育み、将来、地域に貢献しようとする意識を高めることができる。



成果・効果

このように地域と連携した取組は、子どもたちに「ふるさとを愛する心」を育むことにもつながっている。地域の人々が学校に関わり、子どもたちを見守り、支えてくれる姿を目にすることで、子どもたちは「自分たちは地域に支えられている」という実感を得ている。その経験は、将来、地域に貢献しようとする意識や誇りを育む基盤につながっていく。

課題/展望等

海の美術館絵画作成や海岸清掃のように子どもが参画し、達成感を味わう場づくりをしていかねばならない。今後は、地域の行事に対して役割をもって参加したり、運営の話し合いに参加したりするなど主体的に関わる機会をこれまで以上に増やし、自己肯定感や達成感を味わうとともに、社会貢献への意欲を高めてほしいと思う。

地域を愛し、夢に向かって挑戦する児童の育成

基本情報

学校名

緑ヶ丘小学校

児童/生徒数

319名

学校運営協議会

平成29年4月1日 設置

委員構成

地区協議会長
民生児童委員
地域各団体（まちづくり関係）
行政関係者
学識経験者
学校関係者
PTA会長
地域学校協働活動推進員
など13名

会議回数（令和7年度）

5回

背景・取組概要

本校学校教育目標「地域を愛し、夢に向かって挑戦する児童の育成」
育てたい資質・能力「主体性・協働性」

地域（地区協議会、民生児童委員、おやじの会、…）、PTAとの連携は密であり、支援も厚い。その核は学校運営協議会。地域の支援を受けつつ、地域に参画して知恵を絞ったり汗を流したりする活動にも取り組むことで、学校教育目標の実現を図りたい。

工夫・ポイント・特徴的な取組

◆学校運営協議会

- ・児童と熟議「緑ヶ丘小学校をもっと良くするために」
- ・児童から2つの課題提示「あいさつ」「学習態度」
- ・実態や改善策（児童にできること、地域にできること）

◆地域学校協働活動

- ・6年家庭科ミシン学習補助
- ・4年芋の植え付け、収穫
- ・3年荒尾梨学習
- ・1、2年赤ペン先生
- ・全学年読み聞かせ

◆CSと地域学校協働活動の一体的推進

- ・みどりまつり
- ・寺子屋（夏休み学習会）
- ・こころのポスト（R8へ向け準備期間）
- ・ふるさとウォーク



CSでの熟議。児童の課題意識に委員が真剣に応えた。



地域・保護者ボランティアによる読み聞かせにうっとり。



荒尾梨学習。地域特産品の育ち方・工夫を知る。



学力充実タイム。低学年には地域・保護者ボランティアも。



地域の保育園児と芋の栽培。地区協議会、民生児童委員、社会福祉協議会とタイアップ。



地区協議会主催で「寺子屋」を学校で開催。児童延べ70人、地域の先生延べ48人。



祭りに6年が参画。司会やブース運営等。地域の人と協働して創り上げる経験。一体感が生まれる。



祭りで展示した地域住民の絵画作品を高齢者施設に寄贈。



CSでの熟議で生まれたアイデア「こころのポスト」。只今準備中。

成果・効果

○学校運営協議会での熟議により、学校の課題と目指したい方向性について十分な共有が図れた。そのため、地域ができることとして様々な具体的支援を提供いただいた。結果、児童の学力の定着や情操を高めること、郷土愛を高めることに繋がった。

○地域への参画活動により、児童が地域のためにできることを頭と心をフル稼働して考える姿が見られた。地域から役割を任せられ、児童なりに全うしていく経験は他に代えがたく、主体性と協働性を身に付けていく大きな契機となっている。

課題/展望等

▽学校運営協議会の方々や地域住民と児童が直接対話する機会が、現状では限られている。ランチ・ミーティング等の機会を今後作ってきたい。

▽児童が地域の一員としてできることを考え、実践していくことも児童の大きな学びとなる。地域貢献活動について今後充実を図ってきたい。

▽地域学校協働活動について地域や保護者に周知・啓発を図るための工夫（校内掲示、通信等）を考え、多様な人材による多様な教育活動がさらに生まれるよう改善してきたい。

「好きです 中央！」 学校を愛し、地域を愛し、人を愛する中央っ子の育成 ～3 愛運動でみんな笑顔になろう～

基本情報

学校名

中央小学校

児童/生徒数

531名

学校運営協議会

令和3年4月1日 設置

委員構成

地域学校協働活動推進員
地域住民
PTA・保護者
学識経験者
教職員

など13名

会議回数（令和7年度）

5回

背景・取組概要

学校教育目標達成のため、5者連携を図り学校の教育活動を支える方々と共に協力し、やさしくかこくたましい中央っ子の育成を目指した。そのため、子どもが多様な地域の人々と関わり、やり取りをする機会を増やし、課題を発見し、主体的に活動できるようにする必要があった。

→子供主体の学校づくりを人権尊重の精神を基盤とし、地域とともに目指す。

工夫・ポイント・特徴的な取組

◆学校運営協議会（熟議）

- ①第3回の学校運営協議会において「中央感謝祭（くまたんデー）の子どもの出店について、取組を提案し、その提案に対して、学校運営協議会の委員がアドバイスをを行う。」
- ②第5回の学校運営協議会において「中央小学校の学校アンケートから来年度に向けて課題からどんな取り組みができるか、学校運営協議会委員の方と熟議を行う。」

◆地域学校協働活動

- ①3年生が体育の授業でTボールを行い、その指導を有明高校の野球部にサポートしていただいた。専門的な技能の向上を手厚く指導していただき、楽しく授業に取り組むことができた。

◆コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進

中央感謝祭（くまたんデー）を10月に行い、学校運営協議会の委員の皆様にも参加していただき、感謝状を渡した。また、6年生が考えた取り組みとしてお店をだして販売や体験をしてもらい、保護者や地域の方、子どもたちにも参加していただき、中央小学校が盛り上がる祭りとなった。感謝祭を行うまでに、地域や保護者の方、学校運営協議会の方々の協力をしていただき、素晴らしい取組となった。



成果・効果

- 第一回目の学校運営協議会で、中央小のグランドデザインを委員の皆様と確認し、学校の教育目標や子どもたちに身につけさせたい力を共通理解することができた。
- 学校運営協議会で熟議を数回いれたことで、学校運営協議会の委員の皆様と一緒に学校の子どもの力をつけていくことができ、委員の方々も当事者意識を持って学校の行事に参加していただくことができた。
- 中央感謝祭では、学校運営協議会の皆様のアドバイスをもとに取り組みを充実させることができ、感謝祭当日も参加いただき、多くの方々とともに作り上げる祭りとなった。
- 有明高校のTボール指導では、技術指導など専門的なところもあり、学校としても大変ありがたかった。

課題/展望等

- 子供が主体となる学校づくりを目指し、6年生の中央感謝祭（くまたんデー）に取り組むことができたが、他学年の地域とともに活動できるところも考えていく必要がある。
- 学校行事等で学校やPTAだけで取り組むことが多いので、地域学校協働活動推進員の方々にもお願いして、地域の方々の協力を得ながら地域とともにある学校づくりを進めていく必要がある。
- 学校だけでなく、地域を盛り上げていくことができる学校づくりの視点も持ち、取組を考えていきたい。

「ゆいまーる きよざと プロジェクト」

基本情報

学校名

荒尾市立清里小学校

児童/生徒数

83名

学校運営協議会

令和元年4月1日 設置

委員構成

- 委員長（地区協議会代表）
- 副委員長（清里保育園園長）
- 委員
地区児童指導員
民生委員
地域学校協働活動推進委員
保護者代表
学校教育関係者

会議回数（令和7年度）

4～5回

背景・取組概要

地域とともにある学校・行政

- 1 ICTを効果的に活用しながら、学校経営の情報を公開し、社会に開かれた教育課程を実現する。
- 2 これまで蓄積された「あらおの教育」の基盤となる地域の人材・教育力との連携強化。地域も働き方改革に関係し、荒尾の人づくりに貢献する。（本校ランドデザインより）



地域の方の温かさの中で、子どもたちが、もっと地域が大好きな児童に育つことを目指す。

工夫・ポイント・特徴的な取組

4年生の「荒尾梨」学習は、協力的なゲストティーチャーの支援により、梨の摘果や収穫とともに、収穫した梨を児童が事故がないよう「事故梨（事故なし）」として配る『事故なしキャンペーン』も実施した。5年生は、地域の高齢者とのふれあい活動を企画し、公民館に出向き、昔遊びの交流会を行った。6年生が、修学旅行で、荒尾なしのPRを行った。自分たちが作成した版画を使い、荒尾梨を紹介するパンフレットをロイロノートで作成し、長崎市や福岡市の見学先での配布を行った。また「服のチカラ」プロジェクトとして(株)GUからの講義を受けた後、「どんな方法で集めるか。」などを自分たちで考えていった。チラシを作成したり、学校運営協議会の皆さんにも意見をいただくことができた。



成果・効果

学校の応援団や地域の施設等の協力を得て、できる限りの体験学習を行うことができた。25年前からの伝統を引き継ぎ地元の農業や労働を体験して、故郷を愛し、故郷に誇りをもつ豊かな故郷学習ができた。夏祭りでも古着の回収を行い、地域を巻き込んでの活動ができた。回収した衣類は、音楽室の床いっぱいになり、段ボールにすると7箱もあった。

課題/展望等

児童が自分たちの言葉で、活動を地域の方たちに伝えることができるようになったが「自分たちが地域のためにできること」をより具体的に考え、地域の方と協働する動きにつなげていきたい。まずは自分たちの活動の報告会から始め、地域の方からの意見も調査し、児童の声と地域の声を重ねる活動の工夫をしていきたい。

こどもまんなか社会・子供を主語にした学校運営協議会

基本情報

学校名

桜山小学校

児童/生徒数

118名

学校運営協議会

平成29年4月1日 設置

委員構成

地域学校協働活動推進員
保護者代表・地域住民代表
桜山地区協議会
さくらやまげんきかい
校区幼・保園代表
行政関係者
など 11名



学校運営協議会のページ

会議回数（令和7年度）

5回（内3回子供参加）

背景・取組概要

地域とともにある学校として、長年地域と連携を図ってきた取組「防災熟議&防災実践」「さくらやまふれあい祭り」「さくらやまクリーン作戦」を地域と子供たちが一緒になって企画・運営を行っている。

本年度は、次期学習指導要領の論点整理でも掲げられている「自らの人生を舵取りする力と民主的で持続可能な社会の創り手の育成」のために、当事者意識を持って自分の意見を形成し、対話と合意を行う機会として学校運営協議会の場を活用することにした。

こどもまんなか社会・子供を主語にした学校運営協議会では、学校評価の結果から改善策について話し合うだけでなく、次年度の学校運営の方針について熟議することで「社会に開かれた教育課程」の実現を目指している。

工夫・ポイント・特徴的な取組

◆第2回学校運営協議会（R7.7.11開催）

第1回目の学校評価をもとに、子供と保護者の結果のずれや課題となる点について熟議し、子供と大人それぞれの解決策が提案された。また、話し合った解決策を実践するための方法等についても話し合った。

◆第3回学校運営協議会（R7.11.16開催）

“さくらやまげんきかい”とコラボ開催している「クリーン作戦」について、合同で振り返りの熟議を実施。毎年恒例の事業ではあるが、改善策を積極的に出し合うとともに、委員からは子供たちへの賞賛と課題を伝えることで、共に育んでいこうとする風土が醸成されている。

◆第4回拡大学校運営協議会（R8.1.27開催）

第2回目の学校評価をもとに、来年度の目指す学校の姿や目指す子供の姿について5年生全員、全職員、運営協議会委員が合同で熟議。身に付けてほしい5つの資質・能力（全職員の合意形成により決定）の具体的な姿を創りあげた。さらに、次年度の学校教育目標について同メンバーで意見を交わし、それぞれの思いを込めたものが提案された。（次年度の教育目標については、3/4の第5回学校運営協議会で提案し、承認してもらう予定）



学校評価結果をもとに解決策を話し合う



クリーン作戦を振り返り、次年度に生かす



学校運営について各自が当事者意識を持つ

成果・効果

- 年間2回の学校評価について、委員だけでなく子供や職員も交えて熟議を行うことで、各自が当事者意識をもって解決策について考え、行動に移すことにつながっている。
- 次年度の学校運営方針を話し合い、教育目標や資質・能力を共有することで「社会に開かれた教育課程」の実現につながっている。
- 子供を主語にした学校運営を行っていくために、今後もこうした形態で熟議を積み重ねていく機運が高まっている。

課題/展望等

- ▲年間5回の協議会のうち、本年度2～4回目はいずれも昼間開催とした。これは子供たちも一緒に話し合いを行うためなのだが、仕事を休めない委員も多く、日程調整を行っても全員参加の協議会にできなかった。
- ▲地域との連携事業は、教育課程にも位置付けているものが多く、過度な負担感はない。しかし、保護者の参加率が上がらないことに課題が残る。
- ◇委員を委嘱する際に、年間の予定を伝えることで昼間開催でも参加ができるようにする。また、保護者への啓発を保護者代表の委員に依頼する。